

幼小連携のカリキュラムについての一考察（その2）

—小学1年生の「朝の会」「体育」「音楽」の授業観察を通して—

白川 佳子（初等教育学科・准教授）・東 ゆかり（初等教育学科・准教授）
西島 大祐（初等教育学科・講師） ・荒松 礼乃（初等教育学科・講師）
中島 朋紀（初等教育学科・講師）

A Study of the Curriculum in Preschool-Elementary School Cooperation (ver.2):

Investigation by observing the classes of 'Morning Meeting', 'Physical Education'
and 'Music' for the 1st graders

Shirakawa Yoshiko • Azuma Yukari • Nishijima Daisuke • Aramatsu Ayano •
Nakashima Tomonori

Abstract

The purpose of this study is to investigate what “puzzlement” or “stumbling” the 1st graders of elementary school would feel.

From the results of class observations on their 1st graders' behaviors, it was revealed that that the children felt various “puzzlement” or “stumbling”, although the teachers had already taken proper actions for it. However, since some of the children's problems (or “barriers”) continue after the 1st term, it remained uncertain whether the problems were too hard for the children to overcome or solvable with the passage of time.

In the future, we will continue to explore the consistent curriculum focusing on the encouragement of children's learning by observing 5-years-old children's behavior in the preschool .

Key words: preschool-elementary school cooperation, class observation, the pattern of participation

キーワード：幼小連携、授業観察、参加の型

研究の目的

近年の幼小連携の研究においては、子ども同士の交流、教師同士の交流、移行期の子どもへの不安調査などがある。子ども同士の交流についての研究では、岸井（2009）は、幼保園の年長クラスの子どもと小学生との「給食」（5年生）や「国

語」（1年生）の交流活動場面の観察を通して、幼小交流活動のあり方を検討したところ、交流活動では「学校のやり方」に固執せず幼児の主体性や能動性が発揮できるような柔軟さが求められるとしている。また、幼児にとって「学校文化」は異文化であり、小学校では学校のルールを守るこ

とが優先されるため、子ども自身の自己選択や自己決定の許容範囲が園での生活に比べて狭いことも示唆している。岸井（2009）の研究は、幼児の側から学校文化をとらえたものであるが、幼稚園から小学校への移行期においても、同じように、子どもが「学校文化」という異文化に対して感じるであろうとまどいを予想させるものである。

教師同士の交流についての研究では、幼稚園・保育所の保育者が小学校1年生の生活科の授業に補助として参加し、保育と小学校教育の違いを検討した研究（太田、2009）や幼稚園、保育園、小学校の教師や保育者がお互いの教育観について語り相互理解をはかり評価の観点の違いなどを明らかにした研究（宮川・神蔵、2009）などがある。太田（2009）の研究では、保育者が小学校の生活科の授業に参加して感じた保育との違いとして、決められた枠組みの中で行動すること、一斉での活動が求められること、グループで協力して活動を進める場面が多いこと、見通しを持って行動することなどがあげられており、これらの違いが子どもたちにとってとまどいになるかもしれないと保育者は感じていた。また、宮川・神蔵（2009）の研究では、幼保小の保育者や教師が自らの教育観を語ることを通して、幼保の生活では「好きなことにじっくり取り組むこと」が重視され、一方、小では「時間ごとに区切りをつける、今は我慢する、待っている他の子を意識する」などの違いがあげられた。さらに、保育者と小学校教師では、移行期の子どもの「基本的な生活習慣」と「友達とのコミュニケーション」に関するアンケート項目において、小学校教師の方が保育者よりも評価が厳しく、「できていない」とみる傾向があることがわかった。このような結果を踏まえ、宮川・神蔵（2009）は、幼保から「幼児がどのような援助があればいいのか」「幼児期に生活の中で工夫をしてきた関わり方」を小学校に伝えて生かしてもらうことが必要であると考察している。

移行期の子どもの不安感についての研究では、小1プロブレムと子どもの不安についての関連をみるためのアンケート調査（鈴木、2009）や移行期の子どもに対して小学校への不安を縦断的にイ

ンタビューした研究（椋田・鈴木、2009）などがある。鈴木（2009）は、小学1年生の6月にアンケート調査を実施し、幼稚園・保育園と小学校で違うことや小学校生活で不安に感じることを調査した。その結果、子どもが大きく不安だととらえていることは、「未知であるもの」と「獲得する際に難易度が高いもの」、つまり、学習や通学に関するものであった。そして、このような段差に対して教師が積極的に取り組むことが大切であると述べている。また、椋田・鈴木（2009）では、幼児が小学校入学前に小学校で身体活動をしたいという期待をもっていながらも、実際には小学校でルールがあって遊べないという不満に変わっていることや第1子よりも第2子の方が小学校に関する情報量が多く、子ども同士の情報交換が効果的であることがわかった。これらのことから、子ども同士の交流活動や小学校での遊びや身体活動の積極的な取り入れの必要性が示唆された。

小1プロブレムは、移行期の「段差」が原因の1つであるとする研究もあり（上野、2007）、先に紹介した幼小連携に関する先行研究は、幼小連携の必要性を裏付けるものである。

幼小連携や保小連携の実態を調査した研究には、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター（2003）と松寄ら（2008）の研究がある。これらの調査結果によると、幼小連携は全国の96.8%の自治体で実施されており、保小連携は全国の保育所の68.2%で実施されており、保小連携は幼小連携に比べて割合が低いものの、平成20年版の保育所保育指針に保障連携に関する項目が明記されたため、今後、全ての保育所において保小連携が実施されていくことが予想される。

幼小の「移行期」については、お茶の水女子大学附属幼・小・中とお茶の水児童教育研究会の研究（2007）において「接続期」と表現し、前期を幼稚園5歳児10月から3月、中期を小学校1年生入学から、後期を小学校1年生7月までの時期としている。堀越（2009）は5歳児5月から小学校1年10月までの接続期を含む時期に、保育観察と授業・活動観察を行い、幼小での知的活動の類似点と相違点を検討しているが、接続期中期・後期

の時期の「朝の会」「音楽」「体育」の授業を観察した研究はあまりない。

白川ら(2009)では、接続期中期・後期の小学1年生の「朝の会」「音楽」「体育」の授業の観察記録の中から、子どものとまどいと感じられる行動を抽出し、授業中の教師の工夫をまとめた。さらに、小学1年生担当の教師全員に対して小学入学時から4月下旬までの接続期の子どもたちの「つまずき」や「とまどい」の様子と教師自身の取り組みについて調査用紙に記入してもらった。その結果、授業の観察記録からは、教師の側が子どものとまどいに気づいて対応している場面も多くみられたが、子どものとまどいに気づかない場面や子どもの自主性を育てるために取敢えず援助しないという場面もみられた。教師から見た入学当初の時期の子どもたちの「とまどい」の様子と教師自身の取り組みについては、「学校の生活全般」と「授業中」に大きく分類し、「学校の生活全般」では、①登下校、②身の回りの整理整頓、③休憩時間の過ごし方、④友人関係、⑤空間認識、⑥コミュニケーション、⑦活動場所、「授業中」では、①トイレに行くこと、②言葉遣い、③発表、④学習面、についての子どもたちの「つまずき」と教師自身の取り組みの実態が明らかになった。

しかしながら、白川ら(2009)では、授業中の子どもの発話に対する教師の対応についてまでは分析できていなかった。そこで、本研究では、「朝の会」「音楽」「体育」の授業の中で、子どもが「とまどい」を感じていると思われる子どもの発話とそれに教師がどのように対応しているのかを詳細に分析することを目的とする。

方法

授業観察

観察者2名～4名が私立K小学校の1年生の「朝の会」「体育」「音楽」の授業を、デジタルビデオ、デジタルカメラ、記録用紙によって観察記録を行う。観察者は、本研究の幼児教育研究者である。観察の視点としては、授業の指導案にある授業のねらいと内容をもとに、子どもが授業にどのようなとまどいを感じているのか、そして、教

師はそれらの子どものとまどいにどのような対応をしているのかを観察するものである。

観察対象：鎌倉市内の私立K小学校1年1組、1年3組

観察実施日：

1. 「朝の会」の観察 観察クラス：1年1組

1回目：2008年5月13日(火) 8:30-8:50

2回目：2008年6月17日(火) 8:30-8:50

3回目：2008年7月8日(火) 8:30-8:50

2. 「体育」の授業観察 観察クラス：1年1組

1回目：2008年5月13日(火) 1校時「おにあそび」

2回目：2008年6月17日(火) 1校時「リレーあそび」

3回目：2008年7月8日(火) 1校時「新体力テスト」

4回目：2008年7月15日(火) 1・2校時「みずあそび(着衣泳)」

3. 「音楽」の授業観察 観察クラス：1年3組

1回目：2008年5月12日(月) 2校時「まねっこあそび」

2回目：2008年6月17日(火) 4校時「りずむにのってあそぼう」

3回目：2008年7月15日(火) 4校時「けんばんはあもにか①」

結果と考察

1. 「朝の会」の観察 観察クラス：1年1組

(1)「朝の会」エピソード1：係からのお知らせ

表1には、朝の会でのエピソードを示している。表1に示したように、「係からのお知らせ」の時間に、8Cが係の仕事に関する質問をした際、教師はその質問には答えず、9T「今は係からのお知らせの時間です。」と「参加の型」を教えた。そして、質問をする際には、個人的に先生のところに来よう指導していた。さらに、12Cも係に関する質問をしたが、教師は簡潔に質問の答えを言った後でもう一度質問がある時は個別に先生の所へ来るように指導した。小学校では決められた時間内で行動することや全体に投げかけられた話の内容を理解することが求められる。決められた

時間の中で、一人ひとりの子どもの質問を受け付け始めると收拾がつかなくなってしまうため、子どもの状況に合わせるよりも「参加の型」を指導することに重点が置かれていると考えられる。他

にも、子どもたちは発言をした後、「これで終わります。」と言って、その後、聞き手の子どもたちが拍手をするという発言のルールが出来上がってきている。

表1 「朝の会」エピソード1：係からのお知らせ

T (教師) C (子ども)

| | |
|-----|---|
| 1T | 「日直さんは前にきてください。」 |
| 2C | 司会(紙を見ながら)「今から朝の会を始めます。」 |
| 3C | 司会「係から連絡のある人はいますか？」 |
| 4T | 「昨日係を決めましたが、今日、さっそく皆さんにお知らせのある人はいますか？」 |
| 5C | 「はい」 |
| 6C | 司会「Sさん、どうぞ。」 |
| 7T | 「係からのお知らせがある時は〇〇係からのお知らせですと言ってくださいね。」 |
| 8C | 「学習係です。今日は先生が予定表を書いてくれましたが、いつになったら私たちが予定表を書くのですか？」 |
| 9T | 「今は係からのお知らせの時間です。質問がある人は先生に別々に聞きにきてください。」 |
| 10C | 「えーと…」 |
| 11T | 「忘れちゃったね。頭の中で考えてから発表するようにしましょう。」 |
| 12C | 「帰りの会で配り物はどうしたらいいですか？」 |
| 13T | 「配り係の人にしてもらいますね。でも、今のも質問ですね。休みの時間に質問にきてください。先生から付け加えです。係からのお知らせをする時は、朝の会の前に係のお友達と話し合いをしておいてください。」 |

(2) 朝の会エピソード2：消しゴムを忘れた子どもへの対応

忘れ物への教師の対応に関しては、消しゴムを忘れた子どもに対して、教師は「消しゴムがない時はどうしますか?」、「消しゴムがなかったらどうするのですか?」と繰り返して子ども自身に考えさせる発言をしている。そして、「他の人に借りる。」という解決策を子どもが考えたが、教師は「他の人に借りたら、その人が困るね。」と言って、今回は先生が消しゴムを貸すということになった。忘れ物をした子どもに対してすぐ貸してあげるのではなく、「忘れた時はどうしたらよいか」「忘れ物したらどういう風に困るのか」をよく考えさせる指導が丁寧に行われていた。

(3) 「朝の会」エピソード3：集団としての思いやりや自覚

朝の会の日直が司会進行を終えて、「先生のお話です。先生、お願いします。」と言った後に、

「日直さん上手にできましたね。」という教師の発言には、子どもの反応や表情から意欲を読み取っていることがうかがえる。そして、教師が日直を褒めた後には、全員で拍手をする場面が見られ、クラス全員で、うまくできた日直の進行を共有した気持ちが表れている。そして、「今日、〇〇さんがお休みですね。」と欠席した子どもについて教師が発言していたのは、クラス全体での情報の共有と集団・仲間意識の形成のため他者の存在にも意識を配る意図が含まれていると考えられる。

また、子どもが発言した後、クラス全員と共に教師も拍手をする姿が見られた。これは、話を聞く姿勢や場に応じた望ましい態度、雰囲気づくりを心掛けさせる指導につながっていると思われる。朝の会では、「挙手」→「返事」→「発言」→「拍手」などの発言のルールが定着してきており、さらに、挙手をした子どもに対して、日直が「〇〇さん、どうぞ。」と発言を促した際には、他者の発言を肯定的に受容する雰囲気や姿勢づくりが

できていた。

2. 「体育」の授業観察

(1) 「体育」エピソード1：運動会の練習

ラジオ体操で、体操の隊形に開く際には、「〇〇さん（基準の子ども）は動かないで、両手を広げて、体操の隊形に開け。」と子どもたちに分かりやすく説明をしていた。「元の隊形に戻れ」「小さく前へならい」「左向け左」なども、他の子どもを見ながら遅れたりしていたが、「体育」の授業への「参加の型」を習得してきているようであった。ラジオ体操については、子どもたちがラジオ体操をした経験があまりないため、手が反対になったり、速度についていけない子どもが目についた。

次に、運動会のために行進の練習をする場面では、子どもたちは、隣の子と合わせて歩くのがとても難しいようであった。教師は、手を上げる位置を「肩の高さまで」「前ならいの高さまで」と分かりやすいように説明を工夫していた。

(2) 「体育」エピソード2：おにあそびのルール説明

鬼ごっこのルール説明のため、子どもたちは体育座りをしたが、その際、教師は体育座りのこと

を「足ガッチャン」と分かりやすく説明していた。子どもたちにとって鬼ごっこは幼児期から遊んだことのある遊びであるが、体育館の中で線の上だけを使った鬼ごっこという新しいルールであるため、「タッチされたら鬼になること」「鬼になったら帽子の色は白色になること」というルールを質問しながら確認していた。

(3) 「体育」エピソード3：タッチゲームのルール理解

指導案には「タッチゲーム」と書いてあったが、子どもたちへの説明では「二人だけでやる鬼ごっこ」と説明していた。二人組でじゃんけんをして負けた人は後ろを向いて走り、勝った人が追いかけるというゲームであったが、半数の子どもは理解できておらず教師がもう一度説明した。負けた場合、右列の人は右方向に走り、左列の人は左方向に走ることになるので、子どもたちの中に混乱を生じたと考えられる。また、運動場での授業は、机と椅子がないので、下を向いたり砂いじりをしたりと集中力を欠いてしまう場面が多く見受けられた。そのため、教師のルール説明をよく聞いていなかったのかもしれない。

表2 「体育」エピソード4：授業中にトイレに行く子ども

| | |
|------|--|
| 167T | 「赤2、白2」次の整列を呼びかける。 |
| 168C | 「先生、トイレ行ってきます！」 |
| 169T | 「はい、授業中なの忘れないでよ！」 |
| 170T | 「赤2、白2」 |
| 171T | 「我慢できない人は（トイレに）行きなさい」 |
| 172T | 「赤2、白2」 |
| 173C | 何人もの子がトイレに走り出す。 |
| 174T | 「トイレ行き過ぎー！本当に行かなきゃいけないんですかー！ダメな人は行きなさい。トイレ行く人多すぎです。授業の前にちゃんと行きなさいって言ったよね？」 |
| 175C | 「言ったー！」 |
| 176T | 「赤2、白2です」（整列を呼びかける） |
| 177T | 「じゃあトイレに行きたい人は抜けていいですが、並んでください」 |
| 178T | 1分間ほど整列の説明をTがしているが、聞き取れず。 |
| 179T | 「じゃあ前にいる人から座って下さい。」 |
| 180C | 赤2列、白2列で順に座る。 |
| 181C | トイレに行った子どもたちが順次戻ってくる。 (この後、リレー遊びの説明をする。) |

(4) 「体育」エピソード4：体育の授業中にトイレに行く子ども

表2には、「体育」の授業でのエピソードを示している。授業が始まって約20分くらい経ち、次の活動のために移動している時に、一人の生徒が「先生トイレ行ってきます。」と発言し、それに対して、教師が「はい、授業中なの忘れないでよ。」と注意しつつも許可したため、半数くらいの子どもがトイレに走りだした。そこで、教師も驚いて、「本当に行きたい人だけ行きなさい。授業の前にちゃんと行きなさいって言ったよね。」と注意をうながした。確かに、運動場に移動する前に、教師は教室で「お手洗いを済ませて、赤白帽子を持って、グラウンドで会いましょう。」とトイレに行くことを促していたが、運動場に移動するのに時間がかかるため、トイレを我慢した子どもが多かったのではないかと考えられる。

(5) 「体育」エピソード5：新体力テスト（ソフトボール投げ）

この授業では、新体力テストとしてソフトボール投げと立ち幅跳びのグループに分かれて、ルール説明の後、練習をしてから測定をした。ソフトボール投げでは、サークルからでないというルールを守りながら練習していたが、ボール投げの基本がよく分からず、腕だけを使って投げる子どももいた。また、自分の順番ではないときは友達とおしゃべりをするなど、運動場では集中力が続きにくいようである。

(6) 「体育」エピソード6：着衣泳をした感想

着衣泳の授業目標は、「水の中で安全に動けるようにする」ということである。まず、服を着たまま泳ぐと重たくなったり、服が脱げそうになるという経験をした。そして、もし溺れたらどうするのかという教師からの質問に対して、「木の枝につかまって立ちあがる。」「すぐ立ち上がる」という発言があり、自分の足がつかないという場面が想像できていないことがわかる。そこで、教師は「ものすごく深いところだったらどうしますか?」と尋ね、「浮いているものにつかまる。」「子ども

だけで助けずに大人に知らせる。」という注意を与えた。そして、この後、ペットボトルを使って浮いているものにつかまる実演を見る内容へつなげた。

3. 「音楽」の授業観察 観察クラス：1年3組

(1) 「音楽」エピソード1：まねっこあそび（ひげじいさん・アンパンマン）

この日の授業では、導入で「うたえバンバン」の斉唱をした後、展開として「まねっこあそび」に移った。授業の目標は、「拍の流れを感じ、簡単なリズムを表現する」ことである。子どもたちは、幼児期に保育の中でよく経験していた「とんとんとんひげじいさん」「とんとんとんアンパンマン」に対して張り切って楽しく歌う姿が見られた。楽しい雰囲気の中、次々手をあげて色々言い始める子どもたちが出てきた時、教師は「はい、意見のある人は手をあげて。」と「参加の型」を指導していた。他の場面でも手を上げる前に発言する場面が見られ、その都度、教師は「手を上げて発表しましょう。」と注意していた。

(2) 音楽エピソード2：鈴を使ったリズム遊び

音楽の授業では初めて楽器を使う時間であったが、幼稚園で使ったことがある楽器である鈴を用いるということで子どもたちにとっては馴染みやすかったようである。また、幼稚園でやったことのある楽器は何かと尋ね、たいこ、カスタネット、木琴、シンバルなどがあがっていた。鈴のリズム遊びの時、鈴の数が半分しかなく鈴がない子どもは静かに待つという状況があったが、教師も子どもが静かに待つことの大変さに気づき、順番を交代した際には楽器を持たない子は手拍子をすることに変更になった。

(3) 「音楽」エピソード3：歌う時に気をつけること

授業の目標は、「歌のリズムを感じ取って表現する」であったが、導入で「みんなだいすき」を歌い、展開では演奏に合わせて手拍子を打つという内容であった。その後、授業のまとめとして、

歌う時に気をつけることを子どもたちに発表させた。気をつけることとしては、「足を開く」「背筋をぴんと伸ばす」「譜面台には触らない」などであった。また、授業でよかったことは、「歌う声が大きかったことと手拍子がよくできたこと」という意見があがったが、悪かったこととして「声がどなっていた」という意見もあった。このように、音楽の授業への「参加の型」についてかなり時間をとって指導をしていた。

- (4) 「音楽」エピソード4：「うみ」を歌う時に気をつけること

表3 「音楽」エピソード4：「うみ」を歌う時に気をつけること

| | |
|-----|--|
| 57T | (大声で)「海は～♪」という歌い方はよくないということですね。」 |
| 58T | 「では、声のことでありますか？K君」 |
| 59C | 「声の大きさじゃなくて声の出し方」 |
| 60T | 「声の出し方。どういう出し方ですか？」 |
| 61C | 「きれいな声」 |
| 62T | 「じゃあ、みなさん、きれいな声できれいな海になるように歌うんでしたよね。汚い声で歌ったら汚い海になってしまいますね。」 |
| 63T | 「4つ出ました。まずは息継ぎ、声の大きさ、きれいな声で歌う。「海は」と「海に」のところですね。先生から追加します。まずは、歌う姿勢。足を肩幅に広げるんでしたね。教科書の持ち方は教科書の背の所を持ってもう片方の手で端を持ちます。たくさん出ましたが、気を付けて歌ってみましょう。全員、起立。」 |
| 64C | 全員が椅子を机の中に入れて起立する。 |

- (5) 「音楽」エピソード5：鍵盤ハーモニカの演奏ルール

鍵盤ハーモニカの演奏の際には、演奏のルールがあり、教師が子どもたちにルールを尋ねたところ、鍵盤に手をのせる合図は「演奏準備」、ホースに口を付けるのは「吹き口用意」などの答えが出たことから、子どもたちは演奏のルールをよく理解しているようであった。また、教師が赤いカードを上げた時には演奏をやめるというルールも徹底していた。

全体的考察

観察対象のK小学校における「教科別の1年生で身につけさせたい力」は、「体育」①集団行動

表3には、「音楽」の授業でのエピソードを示している。この授業の導入では、「うみ」を斉唱した後、「うみ」を歌う時に気をつけることを子どもたちに考えさせた。子どもたちから出た意見としては、「息継ぎ」「声の大きさ」「きれいな声で歌う」「海はと海にの違い」があり、さらに、教師から「歌う姿勢は足を肩幅に広げる」や「教科書の持ち方」が追加された。このように、小学校6年間を通して必要となってくる授業への参加の型が小学校1年生の1学期に指導されているのである。

で基本となる整列や隊形の仕方を身につける、②健康・安全に留意して、ルールを守って楽しく体を動かす、③縄跳び・ボールなどの器具、鉄棒やマット、跳び箱などの器械を通して、体の動かし方や自分の体を支える力を身につける、④水中じゃんけん、石拾いなどの遊びを通して、水に慣れる、「音楽」①基本的なリズムの活動を通して、音楽を楽しむことができる、②音楽の楽しさを感じ取って聴き、音楽に親しむことができる、③範唱や範奏を聴いて歌うことができる、④基本的な演奏法で鍵盤ハーモニカを演奏できるようにする、とある。

また、K小学校1年生の担当教師のグラウンドデザインに関する資料では、①子どもを褒めて伸

ばす（子どもは成長したい、伸びたいという気持ちを持っているので、ただ褒めるだけではない）。②丁寧に接する。③子どもを信頼し、尊敬する態度で接する。④子どもの能力や努力を認める、⑤子どもの欠点ではなく、長所を認める、⑥子どもの行動の結果ではなく、過程に目を向ける、⑦他の子と比較しない、⑧人間は失敗したり、知らないことがあったりして当たり前であるので完璧さを要求しない、⑨子どもの話を最後までよく聞き、過剰な批判、評価、アドバイスを避ける、⑩子ども自身が決心（決断）し、行動するのを認める対応をする、⑪子どもに援助を申し出る、⑫原因より理由を考える、⑬子どもが見通しを持てるようにする、⑭学校生活の基本を身につけさせる、とある。

特に、移行期である小学校1年生の1学期は、教師は、児童に簡潔で具体的な言葉で指示をすることを心掛け、児童一人ひとりの自覚を育み、場に応じた行動や態度や型（基本的な言動、生活習慣など）を身につけるように促すことを重視していた。

小学校における生活の基本となるのは「集団」であるが、個々の子どもたちがもっている思いや行動を集団の中において丁寧に見出し、いかに他と共有・共感させ、どのように具現化させるかに重点がおかれる。「個」を大切に育てつつ「集団」としての責任や自覚を身につけていくことの連関やバランスが指導の重点におかれているようである。

本研究の「朝の会」「体育」「音楽」の授業観察からも、「児童一人ひとりの自覚を育み、場に応じた行動や態度や型」を身につけるように促す指導が随所に観察された。

無藤（2009）は、小学校1年生では「参加の型」を教え込むが、指導の度合いによって時期が異なり、徹底している場合は小学1年生の4月に集中して指導し、緩やかな場合は1年生の1年間くらいをかけて指導を進めていると述べている。また、このような「参加の型」を指導しなければ学級崩壊につながる恐れや高学年になった時まで「参加の型」について指導しては授業の中身に時間

を割くことができないという問題が起ってくるとしている。しかしながら、「参加の型」の指導ばかりになってくると、低学年の教育というのは本来の教育の中身を教えているわけではなくて、参加の適応の仕方を教えていくことになるという問題点もあげられている。

この「参加の型」についての指導は、本研究の「朝の会」「体育」「音楽」の授業観察場面の全てにおいて観察されたが、子どもにとっては、この「参加の型」の習得が大きな「段差」になっている場合もあるのではないだろうかと考えられる。子どもが新しい環境に適応していくためには一定の適応期間が必要になるということを考えると、小学校の「参加の型」に全てを急激に移行させようとするれば無理が生じて、子どもが幼児期までに獲得してきた能力までもが十分に発揮できないということもあるかもしれない。

今後の課題としては、幼稚園の年長クラスの保育観察を通して、接続期である幼稚園年長児から小学校1年生にかけての「段差」や「カリキュラムの一貫性」について検討していきたい。

引用文献

- 堀越紀香 2009 幼小移行期における知的行動 日本保育学会第62回大会発表論文集, 348.
- 岸井慶子 2009 幼小連携活動は幼児にとってどのような意味をもつか 日本保育学会第62回大会発表論文集, 347.
- 松壽洋子（主任研究者） 2008 保育所と小学校の連携のあり方に関する調査研究 平成19年度児童関連サービス調査研究等事業報告書 財団法人こども未来財団（平成20年2月）
- 宮川萬寿美・神蔵幸子 2009 幼・保・小の連携に関する考察 ―テーマトークによる相互理解― 日本保育学会第62回大会発表論文集, 339.
- 無藤隆 2009 幼小連携のあり方（第8章）『幼児教育の原則』ミネルヴァ書房, 125-144.
- 椋田善之・鈴木正敏 2009 就学前後の子どもが捉えた幼稚園と小学校の違いに関する研究 日本保育学会第62回大会発表論文集, 346.
- お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター 2003

幼児教育と小学校教育をつなぐ幼小連携の現状と

課題 子ども発達教育研究センター報告書

お茶の水児童教育研究書 2007 協働して学びを生み
出す子どもを育てる 文部科学省研究開発指定校
研究発表会要項

太田雅子 2009 幼・保・小連携のあり方についての一
考察；5歳児の保育内容から

日本保育学会第62回大会発表論文集, 338.

白川佳子・東ゆかり・西島大祐・荒松礼乃・秋本篤志・
新井孝昇・美甘亜耶・伊藤由美・栗原由佳・吉田
彩花・上野高裕 2009 幼小連携のカリキュラム
についての一考察 ～小学1年生の「体育」「音楽」
の授業観察を通して～ 鎌倉女子大学紀要第16号,
51-63.

鈴木邦明 2009 子供が小学校入学時に感じる学校間の
違いと小一プロブレムの関連

日本保育学会第62回大会発表論文集,351.

上野ひろ美 2007 保幼小連携の課題に関する考察
奈良教育大学教育実践センター 研究紀要第16号,
109-121.

要旨

本研究では、入学まもない小学1年生の「朝の会」「体育」「音楽」の授業観察を通して、子どもたちの「とまどい」や「つまずき」に対して、教師がどのような対応をしているのかについて検討するものである。

授業観察の結果、子どもの「とまどい」や「つまずき」があることが明らかになったが、教師は「児童一人ひとりの自覚を育み、場に応じた行動や態度や型」を身につけるように促す指導が随所に見られた。この「参加の型」についての指導は、本研究の「朝の会」「体育」「音楽」の授業観察場面の全てにおいて観察されたが、子どもにとっては、この「参加の型」の習得が大きな「段差」になっている場合もあるのではないだろうかと考えられる。

今後の課題としては、幼稚園の年長クラスの保育観察を通して、接続期である幼稚園年長児から小学校1年生にかけての「段差」や「カリキュラムの一貫性」について検討していきたい。

(2009.10.2.受稿)